障害児の子育て支援事業 “きっず・ぷらねっと” の取り組み

○大友由美子¹・橋本一成²(非会員)

(¹NPO法人京阪総合カウンセリング・²兵庫教育大学大学院学校教育研究科)

キーワード: 発達障害, 育児ストレス, 家族サポート

Project “Kids Planet” for supporting families with children who have special needs

Yumiko OTOMO¹ and Kazunari HASHIMOTO²

(¹NPO Keihan Sougou Counseling, ²Hyogo School of Teacher Education)

Key words: developmental disabilities, parenting stress, family support

目 的

NPO法人京阪総合カウンセリング(NPO京阪)は独立行政法人福祉医療機構の助成をうけ、発達障害をもつ子どもの家族のサポートのため“きっず・ぷらねっとー発達障害を理解し生活応援をする集い”を実施したので紹介する。

発達障害をもつ子どもを育てる家族に関する研究では、母親は多くの慢性的なストレスや困難を抱えていることが明らかに(松田・眞田・中島, 2000), ストレスや困難を緩和するため(a)育児に関する具体的なアドバイス, (b)母親の心理面へのサポート, (c)子どもを預ける場所等が必要だと指摘されている(湯沢・渡邊・松永, 2007)。

そこで“きっず・ぷらねっと”では、育児に関するアドバイスとして応用行動分析(ABA)の講義とスキル指導の練習、親の心理面のサポートとしてカウンセラーを交えた親同士の交流(ディスカッション)、子どもを安心して預けられる場として託児に取り組んだ。

方 法

参加対象者は5歳から8歳の発達障害またはその疑いのある子ども、その親、及び障害をもつ子どもとの関わり方に興味のある人とし、NPO京阪会員等を通して募集した。

NPO京阪の会員がカウンセラー(内1名は第一著者)と託児を、第二著者が講師を担当し、市立総合福祉施設の研修室と保育室にて、6月7日から3月28日まで1回2時間、月3回計27回行った(8月を除く)。内容は講義(発達障害の診断や治療法, ABAの基礎や実践について, 約70分)、子どもへのスキル指導の練習(約20分, 10月以降中止)、ディスカッション(参加者4-6名にカウンセラー1名の割合で講義の感想, 家庭や学校での問題についての話し合い, 約30分)であった。取り組みの評価には新版 STAI 状態-特性不安検査

(State-Trait Anxiety Inventory-JYZ: 以下 STAI とする), ABAの基礎知識テスト(KBPAC), 及びアンケートを用いた。また個人情報守秘義務も説明し参加者から承諾書を得た。

結 果

参加人数 大人の参加人数は延べ186名(各回平均6.9名)、託児は第2回目以降毎回行い、延べ109名(各回平均4.2名)の利用があった(兄妹含む)。

KBPAC 1回目は24名が回答(平均13.42点)。うち最終日にも回答した6名の平均得点は11.5であった。この6名の2回目の平均得点は18.5で、取り組み前後で有意に増加していた(対応のあるt検定, $t=5.65$, $df=5$, $p<.05$)。

STAI 1回目のテストは12名、2回目のテストは6名が回答し、両方に回答した4名の得点について対応のあるt検定を行った。状態不安の1回目平均は46.08点、2回目は43.75点で、有意な変化は認められなかった($t=-1.15$, $df=3$)。特性不安の1回目平均は51.00点、2回目は53.50点で、有意な

変化は認められなかった($t=1.90$, $df=3$)。

ディスカッション 当初は講義の感想が中心だったが、次第に子どもへの対応の難しさ、地域や学校で理解を得るための働きかけ等の具体的な内容が語られ、後半以降は参加者同士の共感が生まれ、互いにアドバイスし合うに至った。

託児 参加児と兄妹が“きっず・ぷらねっと”への参加を楽しみにしているという参加者からの声があった。参加者アンケートからは「安心して預けることができた」の項目で高い評価が得られ、託児に関する苦情もなかった。

参加者アンケート 最終日の出席者6名全員から回答を得た。「講義は理解しやすかった」等の項目でやや低めの評価が見られたが、「他の参加者の話は参考になった」や「講義は参考になった」等の項目で高い評価を受けた。

考 察

講義は KBPAC の得点増加や講義内容を応用した成功例が報告されたことから、育児に関するアドバイスとして一定の効果があったと考えられる。

スキル指導の練習は「家でやってみます」等のコメントもあり、指導法が概ね理解されたことや指導練習へのニーズが大きくなかったこと等から、参加者の希望に合わせ中止した。

ディスカッションでは心理面のサポートがめざされたが STAI には反映されなかった。これは“きっず・ぷらねっと”開始時点で参加者の大半が既に子どもの障害を受容していたため、一時的な不安に関連する状態不安(肥田野・福原・岩脇・曾我・Spielberger, 2000)が低下しなかったことと、“きっず・ぷらねっと”には危険の知覚に関する安定した個人の傾向である特性不安(肥田野他, 2000)を変化させるほどの効果がなかったためと考えられる。よって発達障害をもつ子どもの親の不安の軽減や共感の場としてのディスカッションの有効性の検討は今後の課題として残された。

託児は好評だったが、“きっず・ぷらねっと”開催時に限られたため、親の「息抜き」への貢献の程度は不明確である。

ところで、最後まで継続した参加者には“きっず・ぷらねっと”が親同士の交流の場として有効に機能したことが窺われるが、より重度な障害をもつ子どもの親の中には孤独感のためかドロップアウトした者も多くいた。そのため今後は参加者の多様なニーズに十分応えられる取り組みが期待される。

引用文献

- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我洋子・Spielberger, C. (2000). 新版 STAI マニュアル 実務教育出版。
松田真正・眞田敏・中島洋子 (2000). 自閉症児の母親のストレスに関する研究 岡山大学教育学部研究集録, 115, 123-131.
湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ (2007). 自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 10, 119-129.